様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 ２８ 日現在

機関番号：３３９０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2016
課題番号：２５３７０４９９

研究課題名（和文）言語的・非言語的「不均衡」から見る社会的実践の諸相

研究課題名（英文）Aspects of social practice seen from verbal and nonverbal "inequality"

研究代表者
片岡　邦好（Kataoka, Kuniyoshi）

愛知大学・文学部・教授

研究者番号：２０３１９１７２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、コミュニケーション活動に参加するための基盤に「参与枠組み」（Goffman 1981）という暗黙の鋳型を確認し、従来の考察から漏れた「参与／関与」の諸側面を分析することで、そのモデルを精緻化した。具体的には、会話／談話分析で利用されるミクロな視点と「コミュニケーションの民族誌」が標榜するマクロな視点を統合することで、様々な「不均衡」の様相を以下の3領域―①意図を達成するための「コード／モダリティの不均衡」；②社会的行為に参加する際の「スタンス」；③コミュニケーションを取り巻く「環境的不均衡」―から考察・検討し、その成果を研究論文集として2017年に国内言語系出版社から刊行した。

研究成果の概要（英文）：This project has reconfirmed the validity of a analytical template called “Participation Framework” (Goffman 1981), and further extended the possibility of application to related fields through the analysis of unexplored aspects of “participation” and “involvement.” Specifically, we focused on the three areas of “inequality”--(1) inequality in “code/modality” for achieving intentionality; (2) inequality in “stance” for participation in social actions; (3) inequality in the communicative environment--by incorporating a “micro” approach (advocated by Conversation/Discourse Analysis) and a “macro” approach (exemplified by Ethnography of Communication). As a final product we published an edited book titled “Framing Communication” from a Japanese publisher in 2017.

研究分野：談話研究

キーワード：参与枠組み　コミュニケーションの民族誌　不均衡　会話分析　談話分析　参与　関与

１．研究開始当初の背景

（1）　本課題は、申請者による科学研究費プロジェクト、「指導・実践場面における『言語運用能力』の再定義に向けて」（課題番号22520413）の延長線上に位置し、当該研究に従事する中で新たに浮かび上がった研究課題を扱うために企画されたものである。

(2)　その背景として、20 世紀後半以降における「コミュニケーション能力」の捉え方の変遷がある。その提案当初は、話し手／書き手の理想的能力の解明が標榜されたものの、徐々に聞き手／読み手を含めた「相互依存的能力」、文化的規範に根差した異文化間の「相互行為能力」、さらには統合的な「記号操作能力」へと累加的に変貌を遂げてきている。

(3)　しかしその流れの中にあっても、参与者が均質的能力を有するという前提は依然根強く残っている。そこで本研究では、「理想的な話者」（Chomsky 1965）という想定に代わり、「伝達／コミュニケーション能力」が不可避的に「不均衡」状態にあることを前提とし（Hymes 1996）、近年急速に発展する相互行為分析及びマルチモーダル分析の手法を援用して、「実業」における技能の伝授、ひいては間主観的理解の達成を促すための要因を特定することを目指した。

２．研究の目的

(1) 今回の具体的な目的は、社会言語学における主要テーマ、「コミュニケーション能力（communicative competence）」の「不均衡（inequality）」という点に着目し、社会言語学／言語人類学におけるマクロな視点と、相互行為／マルチモーダル分析によるミクロな視点を融合させることで、我々の日常実践を司る様々な「暗黙知」を可視化することにあった。

（2）　本研究の理念として、「ことばの民族誌」が標榜してきた「社会化された文化的実践」という視点を生業の場に応用した。ただし、知識と技能の伝達・共有を理解するためには単眼的・結果指向的分析では不十分であり、ミクロな視点とマクロな視点を仲介しながら、行為の前提とその達成・共有にいたる一連のプロセスの究明を目的とした。

(3)　言語・文化的実践という視点を実証的な考察の対象とするために、それが関与する「不均衡」の諸側面を以下の 3 領域：①意図を達成するための「コード／モダリティの不均衡」；②社会的行為に参加する際の「スタンス／参与枠組みの不均衡」；③コミュニケーションを取り巻く「環境的不均衡」、に絞って考察を進めた。

　具体的な課題として：

①「コード／モダリティの不均衡」

　特に、指導・技能の提供者と受益者の言語的／非言語的資源の乖離が引き起こすミスコミュニケーションの解消や技能伝達のプロセス（⇒ 特定の言語使用や身体所作を通じた意図の伝達方法を提案）

②「スタンス／参与枠組みの不均衡」

　特に、社会的行為に参加する際の参与者の目的意識の乖離が引き起こすミスコミュニケーション解消のプロセス（⇒ ビジネス場面における合意形成の分析；通訳業務による多言語間の相互理解達成の方法を検討）

③「環境的要因の不均衡」

　特に、社会的行為が生起する環境的要因がもととなり、そこから生ずる異なる制約や想定が引き起こすミスコミュニケーション解消のプロセス（⇒ 教室や職場内の配置、道具や「認知的事物」が可能にする拡張された認知様式を分析）

　これらの分析を通じて、社会化された文化的実践が依拠する「暗黙知」と参加者が協働で築く「創発知」の相互作用に着目した。

３．研究の方法

(1)　本研究組織は 3 年をもって完結する研究課題を設定し、そのための手段として研究代表者・分担者および連携研究者による「個別研究」と、グループ全体での「共同討議／ワークショップ（以下「共同 WS」）」にもとづく相互補完的な体制を敷いた。平成 25 年度はおもに資料収集を、平成 26 年度以降はそれに加えて資料分析を開始し、国内外での学会発表と研究論文の出版を通じて成果公表に努めた。

（2）　また、共同 WS を通じて国内外から専門的知識の提供を仰ぐとともに、本研究と趣旨を同じくする研究者と連携して適宜論文発表を行い、5 年以内に国内／国外の出版社から本研究テーマに沿った書籍または専門誌特集号を刊行することとした。

４．研究成果

　申請書においては、コミュニケーションの不均衡を「職場研究」や「制度的談話」の枠組みを用いて相互行為中に着目することとしたが、研究を進める中で、その解明のためには「参与の枠組み」（Goffman 1981)の精緻化が不可欠であることを痛感したため、そのモデルの近年の進展に寄与しうる論文集の刊行をもって、本研究を総括することが必要と考えるに至った。

　その点に留意しつつ、代表者・分担者のみではカバーできない部分にいては随時研究協力を仰ぐこととし、本課題の目標であった「コミュニケーション能力」と「不均衡」の関係を「参与枠組み」モデルにより架橋するために、代表者の本務校である愛知大学にてラウンド・テーブルを開催して議論を深めた。さらにその成果を研究論文集として 2017 年に国内言語系出版社から刊行した。

　惜しむらくは、研究代表者が 2013 年度より社会言語科学会理事として学会誌編集委員長に就任したこと、その後の校務多忙などの状況が重なり、最終年度（3 年目）の基金の一部を 1 年繰り越したため、結果的に 4 年間で研究課題を終了することとなった。

<2013 年度>
(1)　本研究は、実業場面における相互行為を扱うことから、分析用のデータ収集と蓄積が不可欠である。2013 年度の成果の一つは、①（語学）教育と技術指導の現場、②工房／スタジオな どの「ものづくり」の現場、③ビジネス場面における通訳や会議業務におけるデータの蓄積である。以下に掲げた業績は、従来のデータおよび新規データの収集に基づき可能となった。
(2)　そのような業績の一つが、本研究に先行する研究組織から継続的に取り組んできた出版企画（Elsevier 社発行の専門誌、*Language & Communication* の特集号）であり、研究代表者・分担者および研究協力者であるニコ・ベスニエ氏が編者となって 2013 年度の中盤にかけて精力を傾けた企画である(業績欄参照)。言語コミュニケーション系の海外主要専門誌における特集号編纂ということで、談話分析系の国内外研究者から多くの反響を得ており、言語人類学・社会言語学系の教科書 *Living Language: An Introduction to Linguistic Anthropology* (2016)(Laura Ahearn 著：Wiley)でも引用された。
(3) 上記データ収集に並び、研究成果の発表にも務めた。研究代表（片岡）と研究分担者（池田）は、当面の分析結果を第 33 回社会言語科 学会（神田外語大）における共同発表という形で公表した。また片岡は、研究協力者（白井宏美氏）の助言と情報提供をもとに、スタジオにおける番組制作時の映像データの分析結果を「身振り研究会合宿」において発表し、参加者から有益なコメントと指摘をいただいた。さらに、ナラティブにおける概念的スキーマと参与者構造の不均衡について、「話し言葉の言語 学ワークショップ」及び「メディアとことば研究会」においても随時研究成果を発表してきた。

<2014 年度>
(1)　2013 年度と同様に、新規データの収集と蓄積に励んだ。収録した資料はデジタル化してアーカイブとし、必要に応じて書き起こしを行って分析を深めた。
(2)　2014 年度のさらに大きな目標は、教育や技術指導などおける「暗黙知」を分析・可視化し、研究会・学会等の場で成果を公表することであった。この面では、ほぼ目標を達成することができたと考える。具体的には、フィンランドで開催された Sociolinguistic Symposium 20（University of Jyväskylä)での海外研究発表に加え、日本英語学会第 32 回大会シンポジウムでの研究発表、そして第 13 回 対照言語行動学研究会（青山学院大学)、「ラウンド・テーブル『雑談の美学を考える』」（龍谷大学)、早稲田大学言語学シンポジウム（「意味論は語用論とどこで出会えるか？」)、「ワークショップ『リスナーシップとその役割の諸相をめぐって』」（岡山大学）等における招待講演が含まれる。
(3)　また同時に、研究代表者および分担者は、専門以外の分野からの専門的知識の供与を得るべく、2015 年 2 月 20－21 日に代表者の 本務校である愛知大学にて「『参与(関与)枠組みの不均衡を考える』ラウンド・テーブル」を企画・開催し、関連分野の研究者を招聘して「参与・関与の不均衡」の実態を報告していただいた。この会議を元に言語学系出版社に出版企画を持ち込み、書籍刊行に向けて準備を開始した。
(4)　最後に、研究計画書に挙げた海外研究協力者 Niko Besnier 氏（アムステルダム大学）と 2014 年 5 月に東京にて共同研究の可能性を探る面談を行った。また、別の研究協力者 Zane Goebel 氏とは上述のフィンランドの学会（SS 20）にて情報交換を行った。また、山口征孝氏（当時クイーンズランド大学：現神戸市外国語大学）を本科研費にて「ラウンド・テーブル『雑談の美学を考える』」に招聘して討議を重ねるとともに、今後の共同研究の在り方を打ち合わせた。
　以上の準備と成果をもとに、最終年度（2015 年）は更なる研究成果の発信を、学会・刊行物両面で推進することとした。

<2015 年度>
(1)　本研究課題の最終年度にあたり、昨年度末(2015年2月)に愛知大学にて開催したラウンド・テーブルの成果を、研究論文集の編纂という形で世に問うことを中心的活動とした。特に上記、愛知大学でのラウンド・テーブルにて積極的な役割を果たしていただいた秦かおり氏（大阪大学）を研究分担者に加えて編集体制を整えた。具体的には、2015 年度内での刊行を目指し、研究代表者・分担者 3 名が編著者となって査読・校正作業を進めることとした。そこで、2015 年 10 月を論文原稿締め切りとして査読・編集作業を開始した、しかしながら、用務多忙や編集作業の遅延に伴い 2015 年度内の刊行は断念せざるを得ない状況となった。そこで、2016 年度に本基金の一部を繰り越すことで、刊行にこぎ着けるための手続きを取った。
　また、論文集編纂と同時に、研究代表者・分担者 2 名は本研究から得られた成果を国内外の学会にて発表しており（下記、論文・著書および学会発表の欄参照)、当初計画した成果公表の観点からは十分な認知度を確保したと考える。

<2016 年度>
　本研究は、当初 3 年計画で始まったものの、上記理由により 1 年延長せざるを得ない状況となり、2016 年度が最終年度となった。本企画の当初の目的は、「コミュニケーション能力」の「不均衡」に着目し、社会言語学／言語人類学におけるマクロな視点と、相互行為／マルチモーダル分析によるミクロな視点を融合させることで、我々の日常実践を司

る様々な「暗黙知」を可視化することにあった。その目的達成の一環として、研究代表者および分担者が編者となり、2017 年 3 月に本企画の総決算となる書籍（「コミュニケーションを枠付ける」くろしお出版）を無事刊行することができた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）
以下、本研究課題に関連するものに限り掲載する。

〔雑誌論文〕（計 5 件）
<2016 年度>
① 池田佳子(2016).「国際遠隔連携学習実践を促進するICT環境と指導モデルの構築」, *Annual Report of The Murata Science Foundation*, No.30, pp.407-410.（査読なし）
② Yamazaki, Akiko, Yamazaki, Keiichi, & Ikeda, Keiko (2014). Interactions between a quiz robot and multiple participants: Focusing on speech, gaze and bodily conduct in Japanese and English speakers", *Interactional Studies*, 13(3): 366-389. (査読あり)
③ Kataoka, Kuniyoshi (2013). "We just don't get it right!": Multimodal competence for resolving spatial conflict in wayfinding discourse. *Language & Communication* 33 (4), pp. 404-419. (査読あり)
④ Kataoka, Kuniyoshi, Ikeda, Keiko & Besnier Niko (2013). Special Issue on "Centering and decentering communicative competence." *Language & Communication* 33(4), pp. 345-350.(査読あり)
⑤ Ikeda, Keiko (2013). Audience participation in politics: Communicative competence for political communication in contemporary Japan. *Language & Communication* 33(4), pp. 351-365. (査読あり)

〔学会発表〕(計 22 件)
① 片岡邦好 (2017).「コミュニケーションを枠づけるーその要因と多様性を考えるー」『創発的参与構造の解明と類型化』公開研究会、(2017 年 3 月 16 日：国立国語研究所)（招待講演）
② 秦かおり (2017).「本当は不均衡な私たちーママ友の語りにみる参与の創発性と多層性ー」(秦かおり)、『創発的参与構造の解明と類型化』公開研究会.（2017 年 3 月 16 日：国立国語研究所）.（招待講演）
③ 秦かおり (2016).「被災者証言集における「記憶」としての震災：日英マス･メディアによる再文脈化の対照研究」日本英語学会 (2016 年 11 月 12 日：金沢大学). (査読あり)
④ 秦かおり (2016).「ロンドンインタビュー調査にみる imaginary Japan -国際結婚家庭における教育の選択をめぐって--」社会言語科学回第38回大会 (2016 年 9 月 3 日：京都外国語大学). (査読あり)
⑤ Hata, Kaori and Kataoka, Kuniyoshi (2016). "Managing imbalanced positioning in narrative: How "involvement" can betray normal assumption." Sociolinguistic Symposium 21 (2016 年 6 月 18 日：ムルシア大学 (スペイン). (査読あり)
⑥ 秦かおり (2016).「在英邦人との国際結婚家庭における家庭内言語政策とその実態調査」社会言語科学会 (2016 年 3 月 19 日:日本大学). (査読あり)
⑦ 片岡邦好 (2016).「語りの構造とメタファー―身体表象に見る語りの諸相―」メタファー研究会キックオフミーティング (第1回研究会).（2016 年 3 月 17 日：関西大学千里山キャンパス）（招聘発表）
⑧ 片岡邦好 (2015).「日英対照によるマルチモーダル空間談話分析の試み」日本英語学会第 33 回大会 (2015 年 11 月 21 日：関西外国語大学)（招聘発表）
⑨ 秦かおり (2015).「インタビューナラティブにおける不均衡の是正」日本英語学会(2015 年 11 月 21 日：関西外国語大学) (査読あり)
⑩ Kataoka, Kuniyoshi (2015). (In)compatibility of an interactionist tenet and cultural *kata* 'form/shape/style/model' The 14th International Pragmatics Conference (Antwerp, Belgium: July. 31, 2015). (査読あり)
⑪ Hata, Kaori (2015). How can interview narratives be resumed after unexpected interruptions generated by children. (International Pragmatics Association, (Antwerp, Belgium: 2015, July 28). (査読あり)
⑫ 片岡邦好 (2015).「語りにおける聞き手支援の一形式」 ワークショップ「リスナーシップとその役割の諸相をめぐって」(2015 年 3 月 22 日：岡山大学).（招待講演）
⑬ 片岡邦好 (2015).「ラジオ番組収録における多層的な環境フレームの交わりについて」「参与 (関与) 枠組みの不均衡を考える」ラウンド･テーブル (2015年2月21日：愛知大学).（企画･発表、査読なし）
⑭ Ikeda, Keiko, Rubin, Jon, & Dyba, Natalia, (2015). Developing Leadership in the Implementation of COIL Internationalization Initiatives. Association of International Education Association (Washington DC, USA: 2015 年 2 月 16 日). (査読あり)
⑮ 片岡邦好 (2014).「民族詩学的アプローチからみる語りの不均衡について」日本英語学会第 32 回大会シンポジウム「ナラティブ研究における社会貢献の可能性を巡って」(2014 年 11 月 9 日：学習院大学).（招聘発表）
⑯ 片岡邦好 (2014).「言語と身体の『詩的』表出について―民族詩学的アプローチの可能性―」第 13 回 対照言語行動学研究会 (2014 年 11 月 1 日：青山学院大学)（招待講演）

⑰ 片岡邦好（2014）.「雑談のジャンル性、非ジャンル性、間ジャンル性」 ラウンド・テーブル「雑談の美学を考える」（2014 年 7 月 20 日：龍谷大学 深草キャンパス）（招待講演）
⑱ Kataoka, Kuniyoshi (2014). Interactionist ideology seen from an ethnopoetic perspective. Sociolinguistic Symposium 20 (University of Jyväskylä, Finland: June 20, 2014). (査読あり)
⑲ 池田佳子・岩崎千晶・バイサウスドン(2014).「インフォーマル学習」を捉える―媒介物（メディア）と、空間と、相互行為に着目して―」,『日本語を母語あるいは第二言語とする者による相互行為に関する総合的研究：第5回研究発表会』（北星学園大学: 2014 年 3 月 17 日）(査読なし)
⑳ 片岡邦好（2014）.「グリコのプリッツを味わう：CM と『語り』としてのパフォーマンス」第 43 回メディアとことば研究会（2014年3月14日：神田外語大学）. (査読あり)
㉑ 片岡邦好（2013）.「『問い』のスキーマと『合いの手』の構造化機能について」第8回話しことばの言語学ワークショップ「ナラティブ分析、言語人類学、相互行為言語学の観点から」（2013 年 12 月 27 日：東京大学 駒場キャンパス）.（企画・発表、査読なし）
㉒ Kataoka, Kuniyoshi (2013). What makes multimodal sings into a narrative?: A case study of a TV commercial narrative. The 13th (International Pragmatics Conference at New Delhi, India: Sept. 13, 2013). (査読あり)

〔図書〕（計 11 件）
① 片岡邦好・秦かおり（2017 刊行予定).「第 2 部「話しことばの言語学」実践編」、『話しことばへのアプローチ―創発的・学際的談話研究への新たなる挑戦―』（鈴木亮子・秦かおり・横森大輔編）、ひつじ書房、2017 年出版予定.（査読あり）
② 片岡邦好・池田佳子・秦かおり（編）(2017).『コミュニケーションを枠づける』 くろしお出版. 292 頁.
③ 片岡邦好・白井宏美（2017）.「ラジオ番組収録における多層的な環境フレームの交わりについて―制度的制約に伴う現象を中心に―」、『コミュニケーションを枠づける―参与・関与の不均衡と多様性』（片岡邦好・池田佳子・秦かおり編）, pp. 263–284. くろしお出版. (査読あり)
④ 片岡邦好・池田佳子・秦かおり(2017).「参与・関与の不均衡を考える」、『コミュニケーションを枠づける ―参与・関与の不均衡と多様性』（片岡邦好・池田佳子・秦かおり編）、くろしお出版、pp. 1-26.（査読あり）
⑤ 秦かおり(2017).「対立と調和の図式―録画インタビュー場面における多人数インタラクションの多層性―」、『コミュニケーションを枠づける ―参与・関与の不均衡と多様性』（片岡邦好・池田佳子・秦かおり編）、くろしお出版、pp. 131-154.（査読あり）
⑥ 片岡邦好（2017）.「マルティモーダルの社会言語学―日・英対照による空間ジェスチャー分析の試み―」、『対照社会言語学』（井上逸平編）, pp. 82-106. 朝倉書店. (査読あり)
⑦ 片岡邦好（2016）.「雑談とゴシップのはざまで―規範と逸脱から考える―」、『雑談の美学：言語研究からの再考』（村田和代・井出里咲子編）, pp.281-307. ひつじ書房. (査読あり)
⑧ 片岡邦好(2014).「言語相対論と言語習得研究の接点」、『現代社会と英語―英語の多様性をみつめて』(塩澤正・榎木薗鉄也・倉橋洋子・小宮富子・下内充編著) （吉川寛先生退職記念論文集）, pp. 229-241. 金星堂.（査読なし）
⑨ Kataoka, Kuniyoshi (2014). On inter-subjective co-construction of virtual space through multimodal means: A case of Japanese route-finding discourse. In Yamaguchi, M., Tay, D., and Blount, B. (Eds.), *Approaches to Language, Culture, and Cognition: The Intersection of Cognitive Linguistics and Linguistic Anthropology*, pp. 181-216. Palgrave MacMillan. (査読あり)
⑩ 片岡邦好（2013）.「行為と知覚のナラティブ：テレビ CM のマルチモーダル分析から」佐藤彰・秦かおり（編）『ナラティブ研究の最前線―人は語ることで何をなすのか』, pp. 273-293. ひつじ書房. (査読あり)
⑪ Ikeda, Keiko (2013). *Audience Participation in Politics-Interactional Analysis of Political Communication in Contemporary Japan-* 関西大学出版 単著、205 頁.（査読なし）.

〔**産業財産権**〕
なし

〔**その他**〕
なし

６．研究組織
(1)研究代表者
片岡邦好（KATAOKA Kuniyoshi）
愛知大学・文学部・教授
研究者番号：20319172

(2)研究分担者
池田佳子（IKEDA Keiko）
関西大学・国際部・教授
研究者番号： 90447847

(3) 研究分担者
秦かおり（HATA Kaori）
大阪大学・言語文化研究科・准教授
研究者番号： 50287801

(4)研究協力者

ニコ・ベスニエ（Niko BESNIER）
University of Amsterdam・教授

ゼーン・ゴーベル（Zane GOEBEL）
La Trobe University・准教授

白井宏美（SHIRAI Hiromi）
慶應義塾大学・SFC 研究所上席所員

山口征孝（YAMAGUCHI Masataka）
神戸市外国語大学・准教授